
天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）

若山 かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使に捧げる鎮魂歌^{レクイエム}

【Nコード】

N1122Q

【作者名】

若山 かおり

【あらすじ】

交通事故に遭い、意識不明のまま目覚めない妻。うなだれる僕の前に自称『天使』が現れた。

天使は言う。

「もし、自分が死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることができるよ」

頷きかけた僕は、ふと昔の出来事を思い出す。

僕が出した答えは……。そして、天使の正体は？

（前書き）

この作品の投稿後、頂いた感想をもとに改稿した 改稿版 があ
ります。

同じようで違う話になっております。

改稿したので、こちらは削除しようかとも思ったのですが、これ
はこれで一度書き上げたものなので、記念に残しておくことにしま
した。

「もし、自分が死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることが出来るよ」

目の前のそいつは、そう言った。

穏やかに晴れた、とある休日の午前中。溜まりまくった洗濯物を片付けた僕と彼女は、いつものように、いつものスーパーへ買い物へ出かけた。

レジ袋二つを一杯にして、僕たちは買い物を終えた。重たい方は僕が持ち、花かつおとポテトチップがメインの軽い方は彼女が持つ。建物の外へ出ると、あまりの太陽の眩しさに思わず目をつぶった。そんな僕の隣で嬉しそうに彼女が言う。

「ねえ、夏、^{ナツ}お天気がいいから、遊歩道をお散歩して行こっ」

僕のレジ袋の内訳は、玉ねぎ、じゃがいも、ピーマン、レタス……。肉や魚は先週、買いためたので、既に家の冷凍庫に詰まっている。よって今日の買い物に生鮮食料品は、なし。料理酒とサラダ油とシーチキンの缶詰が重たいけれど、このお日様を楽しまないのは、もったいない。

「うん、じゃあ、寄り道して行こうか」

僕たちは川沿いの遊歩道をのんびりと歩いた。川の中では鯉がのんびりと泳いでいる。

人通りはそれほど多くはないが、たまに僕たちのような買い物帰りの人や、赤ちゃんの日光浴らしきベビーカーのご婦人、元気に歩くご老人などとすれ違う。

やはり散歩中らしきおじいさんが、手に提げていた袋からパンを取り出した。それを千切って川に投げる。鯉たちは今までのんびりしていたのが嘘のように、目の色を変えてパンくずに群がった。

「うわあ、すごいねえ」

大きな声で、彼女が何とも評価しかねる感想を漏らした。僕は「そうだね」と相槌を打つ。

二人とも、そのまま何となく並んで鯉を見る。

「あれ、小さい魚もいるみたいだね」

鯉の迫力に負けて今まで気づかなかったが、よく見ると川底に小さな黒い影が見えた。確か、この川にはオイカワやフナもいるらしい。けれど、僕はあまり目が良い方ではないので、よく分からない。だから彼女に訊いた。

「鯉以外に何かいる？」

彼女はしばらく目を凝らすようにじつと川底を見ていた。そして急に、にこつと笑って言った。

「アイ！」

「え？ 何？」

僕は彼女の言ったことが理解できなくて聞き返す。

「だから、あなたが『恋以外に何か要る？』って聞くから、私は『愛が要るよ』って答えたのっ！」

言って、彼女は照れたようにそっぽを向く。その仕草は少女のようだが、彼女は少女というほど若くない。何しろ結婚して五年になる僕の妻なのだから。

僕の名前は、かんばら なつき神原夏樹。

彼女の名前は、かんばら なつき神原名月。

同じ名前である。

単なる偶然。それが縁で親しくなったのも事実であるが。

結婚する前は良かった。彼女は僕のことを『神原さん』と呼んでいたし、僕は彼女を旧姓の『星野』と呼んでいた。それが結婚して同姓同名になってしまった。さすがに結婚してまで苗字で呼ぶのは何か変だ。かといって、彼女を自分と同じ名前で呼ぶのも、やはり変だ。それで、彼女は僕のことを夏と呼び、僕は彼女を月と呼ぶことにした。

月は少々、子供っぽいところがある。僕より二歳年下だから、で

はなく、それが彼女の性格なのだろう。時々、困ってしまうこともあるが、いつまでも変わらなくあつて欲しいとも思う。

「あつ、にんじん、買い忘れたっ！」

月^{ツキ}が叫ぶ。共働き夫婦なので休日の買い物は重要だ。買い忘れは痛い。

「ちょっと待ってて。すぐ買ってくるからっ！」

彼女は自分が持っていたレジ袋を僕に押し付け、スーパーに向かって逆戻りした。そんなに慌てなくても、と、ゆっくりと僕は後を追う。

その、僕の目の前で、事故は起きた。

スーパーの前の横断歩道。

右折してくる車に。

彼女は。

はねられた。

ぐったりとした月^{ツキ}を抱えながら、僕は何かを叫んでいたと思う。何かなんだか分からない。

近くにいた人が、すぐに救急車を呼んでくれたらしい。

彼女が担架で運ばれて、僕も飛び乗った、らしい。

もう、本当によく分からない。

気づいたら、彼女は病院のベッドの上に寝かされていて、僕は彼女のベッドに突っ伏していた。

彼女は目覚めない。

外傷はたいしたことがなかったが、頭を強く打ったらしい。

あれから三日たった。

けれど、彼女は目覚めない……。

「絶対、僕よりも先に死なないでくれよ」

結婚する前に、僕が彼女に言った言葉。

「そんなの、分からないわよ。先のことなんて知らないもんっ」

むすつとした顔で答える彼女。

「君がいなくなったら、僕はもうしたらいいか分からないよ」

僕がそう言った瞬間、彼女は顔を真っ赤にして僕の胸をぽかぽかと叩いた。曰く「あなたって人は、なんて恥ずかしい台詞を平気で言うのよっ!？」だそうで。「嬉しいじゃないのっ」と呟きながら、「こんな顔をあなたに見られたくないっ」と顔を隠す。僕の胸に自分の顔を押し付けるという行為によって。

彼女はしばらく僕の胸の中で喚いたあと、自分の顔をぱちんと叩いた。何事もなかったかのように僕から離れて、それでも明らかに作ったと分かる真面目な顔で言う。

「じゃあ、あなたが先に死んだ場合、残された私はもうしたらいいの?」

「僕が死んだ後のことは分からないよ。君の自由でいいよ」

「冷たい人ね。だったら私が先に死ぬもんっ」

「それは駄目だ。僕が先だ」

「いいえ! 私っ」

しばらく不毛な言い争いを続けた末、諦めたように彼女が言った。「仕方ないわね。私の方が二歳年下だから、あなたが死んだっきり二年後に死ぬわ。これでいい?」

珍しく彼女が折れた。意地っ張りで子供っぽい彼女が折れた。だから、充分に長生きしてね。そう言って、彼女は抱きついてきた。

なのに、先に逝ってしまうのか……?

「ちよつと、いいかな?」

突然、背後から声がかかった。子供の声というには大人びているが、少年とも少女とも判断しかねる高い声だ。

僕はどきりとした。ここは病院の個室で、僕と月ツキしかいなくて、ドアは閉まっていて、ドアが開いた音は聞いていなくて。だから、僕の後ろに人がいるはずはないのだ。

僕は恐る恐る、振り向いた。

そこに、そいつはいた。全身にシーツのような白い布を巻きつけた、少年のような少女のような性別不明の顔立ちの。

「もし、自分が死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることが出来るよ」

目の前のそいつは、そう言った。

「君は誰だ？ どうやってこの部屋に入ってきた？」

動揺していたわりには、よくまとなことが言えたと思う。月が^{ツキ}目覚めない。その非常事態が、僕をこの非現実的な状況に順応させてしまったのかもしれない。

薄暗くなり始めた日の光を頼りに、そいつの姿を精察する。目の悪い僕は電灯の助けを借りたいところだけれど、スイッチは入り口の傍で、ちょうどそいつの後ろにある。

そいつは白いリノリウムの床にすくと立っていた。服装は白づくめ。ただ、光度が足りないから青白く見える。そいつの周りには、まるで色のない世界のような。背はあまり高くなく、顔立ちはどこか幼い。

そいつは自分に注意が向いたことが嬉しかったのか、にやつと笑った。

「俺は神様の下働きだつ。ってことは、俺は『天使』かつ！？」

自分で突っ込みを入れる自称天使。一人称は『俺』だが、『彼』だか『彼女』だか分からない。天使に性別を求めてはいけないのかもしれない。そいつが天使だというなら。

「彼女を助けられるって、どういうことだ？」

僕は天使に問いかける。問いかけるといふより、詰問といった方が正しいだろう。僕が話に乗ってきたので、天使がにこにこしながら寄ってきた。僕が座っているのと同じ丸椅子を月が^{ツキ}寝ているベッドの下から引きずり出して、僕の隣に並べて座る。天使というのに黒髪で、部屋が暗いからはつきり分からないけれど、たぶん目も黒っぽい色で、天使の翼らしきものも天使の輪らしきものも見当たらず。

ない。

「神様のところには、死ぬ人間の名前が書かれた名簿があるんだよ。で、その名簿は名前がカタカナで書いてあるんだ」

天使はくりくりとした目でじつと僕を見る。もう分かるだろ、と目が言っている。

「彼女の名前は『カンバラナツキ』。そして、あなたの名前は」

「『カンバラナツキ』だ」

僕が答える。僕と月は同じ名前だ。

「だから、彼女じゃなくて、あなたが死ぬんでもいい。名簿上は問題ないよ」

天使はにっこりと笑う。

僕が死ねば、月は助かる？ こいつに頼めばそれが可能？

こいつは天使ではなくて、悪魔というのではないだろうか。

けれど、月が助かるなら、僕は……。

僕が死ぬ。

僕は、終わる。

鼓動が、止まる。

動かない、心臓。

フラッシュバック。

「心臓がびくびくしていてね。もう、可愛くって！」

そのとき月は妊娠^{ツキ}していた。

超音波検査で初めて心拍が確認された日のことだ。検診の様子を彼女は事細かに教えてくれた。それから、「次の検診は絶対一緒に行つてね。一緒に見てね」と言った。

その検診の日、無理して年休を取って彼女と一緒に産婦人科の門をくぐった。ものすごく気恥ずかしかったけれど、行ってみれば同じような顔をした旦那さんが結構いて、ほっとした。

そして、超音波検査を見た。

医者に説明されなければ、何が映っているのか分からない画面を見た。

その中央で、ぴくぴくしているはずの、心臓。

けれど、画面の中で動いているものは、何もなかった。

「残念ですが……稽留流産です」

医者が言う。

「この子は、どうなるんですか？」

乾いた声で僕が言う。心臓が動いていないのだ。どうなるも、何も、ない。けれど、理解できなかった。入院すればよくなるのかも、なんてことすら思った。

「誰も何も悪くなくても、妊娠初期では十五パーセントの人が流産します」

僕の頭は麻痺していて、医者の言っていることはまともに聞こえていなかった。「あんた、医者だろう、何とかしてくれよ」そんな、すごくありがちなことを言った気がする。

服を引っ張られる感覚がしてその方向を見ると、月が僕のシャツの裾を握っていた。彼女はただ涙を流していて、ただただ涙が流れ続けていて　僕は彼女を抱きしめた。

「私が悪かったの。私が体に悪いものを食べていたから、規則正しい生活を送っていなかったから」

「違う。君は悪くない。だって、どうしようもなかったんだ」

僕たちは抱き合って眠った。月は、眠っている間に僕がいなくなってしまうことを恐れるかのように、決して僕を放さなかった。

一月经って、月は職場に復帰した。僕たちは社会人で、僕はもと年休以上に休めないし、彼女だっていつまでも悲しんではいけない。

あるとき、月は僕に言った。

「あなたが死んだ二年後に私が死ぬ、っていう約束。あれ、撤回する。私、誰かに先に死なれて取り残されるの、もう嫌」
僕は何も答えられなかった。

僕が死ぬ。

僕は、終わる。

鼓動が、止まる。

動かない、心臓。

残された彼女は、どうなる？

「さて、どうしたい？ 『カンバラナツキ』さん。あなたが死ぬのと彼女が死ぬのと、どっちを選ぶ？」

天使の声に現実引き戻された。いや、これは本当に現実なんだろうか？ 僕の目の前には眠ったままの月^{ツキ}がいる。青白い顔で瞳を閉じている。そんなの嘘だ。彼女は歳不相応なくらいに元気なんだ。時にはこつちが恥ずかしくなったり、慌てたりするほど子供っぽかったりして僕を困らせる。僕にとって、いるのが当たり前で、いなくてはいけない存在なんだ。

「……選べないよ」

無理やり言葉を吐き出した。

「嫌だよ。残すのも、残されるのも」

まるで子供のわがままだ。でも、これが本心だ。天使はそんな僕を笑うわけではなく、じつと見つめている。僕は俯いていたけれど、僕より背の低い天使からは僕の表情は丸見えだ。

「僕たちは 僕と月^{ツキ}は、一度、取り残された。……僕たちには子供がいた。生まれなかった子供がいた。僕たちは残されて、とても辛かったんだ」

辛かった。どうしようもなく辛くて悲しかった。

「……そうやって、親を悲しませて先に死んだ子供がどうなるか、知っている？」

透明な、感情の読めない声で天使が言った。この天使が初めて天使らしく見えた。僕は戸惑う。天使は僕に答えを求めているわけではないらしく、静かに言を継ぐ。

「『逆縁の罪』といって、死ぬことも赦されず、神様の下働きになるんだよ」

逆縁とは仏教で、神様とか天使というのはキリスト教じゃなかったつけ？

僕の疑念の眼差しに、天使は慌てて取り繕う。

「ま、ともかくつ。あなたは自分が死ぬのも彼女が死ぬのも嫌だ、というわけだね？」

「そうだ」

きっぱりと言い放つ。

天使は、にやあつと笑った。いたずらがうまくいった子供のように。

「よっしゃあつ！ 大成功つ。俺はその言葉を聴きたかったんだつ！」

椅子から飛び下りてガッツポーズを取る天使。

「え？」

呆然とする僕に、天使はかしこまったように、こほん、と咳払いをする。

「えーと、どういうわけか運のいいことに、ここに『カンバラナツキ』がもう一人います。というわけで、この『カンバラナツキ』に死んでもらうことにして、彼女には生き返ってもらいましょう！」

「ここに？ もう一人？」

「うん、ここに」

天使は自分を指す。

「君は？」

「『カンバラナツキ』」

僕は息を呑む。自称天使の正体が分かった。

「この子の名前、どうしようか？」

あの頃、まだあの子が月のお腹にいた頃のこと。彼女が僕に訊いた。

「え？ まだ性別、分かってないんだよね？」

「でも、『この子』じゃ可哀相だから、とりあえずの名前」

しばし、僕は考える。

「……じゃあ、『ナツキ』」

「それじゃあ、私たちと一緒にじゃない」

「いいだろ？ 君が月で、僕が夏。そして、この子がナツキ」

「君は、『ナツキ』なんだね」

「だから、そう言っているじゃん」

ちよつと小生意気なふくれっ面。僕は思わず、天使を
ナツキ
を抱きしめようとして、逃げられた。

「駄目だよ。俺はこの世界の存在じゃないから、触っちゃ駄目っ」
べーっ舌を出すナツキ。

よく聞けば、喋り方が月にそっくりだ。顔は、ひよつとして、
な
んとなく僕に似ている、かもしれない。

「それじゃ、そろそろ行くね。これで俺はちゃんと死ねるから」

「ええと、君は既に、その……死んでいる、はず……」

「だから言っただろ。神様の下で死ぬことも赦されず下働きをしている、って」

どういつ理屈なんだろう。よく分からない。

けれど、どうやらこれで本当にお別れらしい。

僕たちが逢えるのを楽しみにしていたナツキ。喪われてしまった
ナツキ。そのナツキが今、目の前にいる。ここに留まることは無理
でも、その姿をせめて一目、月に見せてあげたい。しかし、どうや
らそれは叶わないようだ。

「あと、そいつっ！」

ナツキはびしっ、とベッドに横たわったままびくりともしない月

を指さす。

「俺の妹には『なつき』なんて名前、付けるなよ。ややこしくて仕方ないから」

ナツキは虚空を見つめ、少しだけ考えるポーズをする。それから、にやあっと笑った。

「うん、俺が名前をつけてやる！ そいつは『愛』だっ！」

「え……？」

「妊娠五週目。もうちょっとしたら、ゲロゲロ吐くから、気をつけてやってな」

僕は驚いて彼女のお腹の辺りを見た。

そして、はっと気づいたときには、もうナツキはいなかった。

「あなた、ねえ、あなた……。もう、夏^{ナツ}！」

揺すぶられて目を開けた。目の前はとても眩しく、真っ白だった。目をこすりながら体を起こすと、初めに視界に入ってきた白いものは白い掛け布団カバーだったということが分かる。それにしても眩しいのは、明るい太陽の光のせいだ。すっかり朝になっている。

そして、彼女の姿を捉えたとき、眠気はいっぺんに吹き飛んだ。

「月^{ツキ}！」

月^{ツキ}が目覚めた。僕のことを見つめている。彼女は、彼女の足に頭を乗せて寝ていた僕にちよつと不満顔だ。すっかり痺れてしまつて足の感覚がない、と文句を言う。けど、それが何だ！ 僕なんかこの三日間、ほとんど寝ていなかったんだ！

僕は彼女を抱きしめて、頬^{ナツ}を擦り寄せる。

「ちよつ……。ちよつと、夏^{ナツ}！ 髭が痛いわよ！」

髭なんて、この三日、伸ばしっぱなしだ。

きつくきつく、彼女を抱きしめる。痛いのだ、苦しいのだ、そんな言葉は耳からすり抜けていく。そう言っている彼女だって、僕のことを強く抱きしめているのだ。

月^{ツキ}を抱きしめたまま、僕は言った。

「……ナツキに逢ったよ」

この『ナツキ』が誰を指すのか、言わなくても彼女にはすぐ分かった。なぜなら彼女はこう答えたから。

「うん、私も。『愛が在るよ』って」

「……もともと死ぬ予定もない者を、名簿だなんて虚言をぬかして惑わしおって」

神様はどうやらお怒りらしい。ナツキはぺろつと舌を出した。

「だってあの二人、このままじゃ俺のこと忘れないでしょ？ それじゃ、これから生まれてくる妹が可哀相じゃん」

「なんじゃ、てつきり妹に生まれ変わりたいとでも言うと思ったが

……」

「なあに言ってるのっ！ 俺は俺。妹は妹。生まれ変わりたいくなんかないね。俺はちゃんと俺として愛されていたからいいの」

神様相手に傍若無人に言い放つ。けれど、瞳の奥が揺れている。

ナツキは小さな声で呟いた。自信なさげに。

「俺さ、親孝行できたかな？ 今まで悲しませるばかりで、何もできなかったけど、何か、できたかな？」

ナツキは鼻がつんと痛くなって、喉がかつと熱くなるのを感じた。目から落し物をしないように、瞼を閉じる。

神様は苦笑した。そして、言った。

「お前の両親を想う気持ちに免じて、逆縁の罪を赦そう。 幸せにおなり」

ナツキの体は溶けて、解けて、光になった……。

（後書き）

ものすごく悩みました。内容も、文章も。

自分の中にあるイメージを巧く表現できず、文章力のなさ、構成力のなさに泣かされました。

この想いをどう書いたらいいんだろう……！ と。

ここまで読んでくださってありがとうございます。更に感想などいただけたら、床に転げまわって喜びます。よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122q/>

天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）

2011年7月23日03時27分発行